
ドラゴンプラネット

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンプラネット

【Zコード】

Z7928Z

【作者名】

級長

【あらすじ】

プレイヤーがゲームの世界に入るという最新型ゲーム、ドラゴンプラネットオンライン。プレイヤー達の熱き戦いが今、始まる！メビウスリングで連載していた分に大幅な加筆修正を加えて掲載。最新型ゲームを巡り、様々な思惑が錯綜する。

プロローグ

『私もつとせ、生きたかつたなあ……』

『渚！』

一人の少女が血を流して倒れている。胸から赤い液体がとめどなく溢れる。毎日のよう見ゆる、昔の夢。そして、いつもここに目が覚めるのだ。

「朝か。寝オチだなこりや」

俺はベッドから身体を起しす。布団に入ったはいいが、そのままゲームをして寝オチだ。いくら携帯ゲームのソフトだからって、一日でRPGをクリアすることないだろ？。これはナンセンスだ。

「こりや、次の実況に使えんな

俺は配信するゲーム実況動画の心配をした。もともとRPGは実況動画に向かないし、初見プレイでなければ面白みも薄いだろ？。しかもファイナルファンタジー？といえば誰もがお馴染みの名作、今更紹介動画も必要ないが。

「次はフリーゲームでホラー仕入れるか。そういう青鬼の新バージョン出てたつけ」

動画の心配も早々に俺は支度を始める。これでも高校生なのだから、学校に行かねばならない。

そうなればこのさして広くない、机とベッドに本棚くらいしかない部屋から出なければ。俺は洗面台に行き、顔を洗つて年不相応に白くなつた髪の寝癖を直す。シリアルで軽く朝食を取つたらブレザーの制服に着替えて出掛けよう。眼鏡がなければほとんど何も見えないので、眼鏡は欠かせない。

俺はある事情により、ある刑事に育てられた。親の行方は依然として知れない。ただ、確かなのは弟がいるということだ。

「弟、か」

俺は玄関でローファーを履くと扉を開けて家を出る。俺が住んで

るのは自動車と味噌で有名な県、愛知。その愛知の味噌であるハ丁味噌を名物とする岡崎市のマンションだ。別に味噌臭くないぞ。

弟といつワードでつゝ思い出してしまつことがある。しかし、それをのんびり回想する暇はないよつだ。クラスメイトを通学路で拾わねば、あとで白髪を弄られる。

そんなわけで俺はそそくさと階段を降りてマンションを出る。俺の家は10階だが、エレベーターなど待てない。階段を高速で駆け降りる。エレベーターを使わないのは運動不足解消のためだ。ゲームは運動不足に陥り易いからな。

俺は樂々とマンションの一階まで降り立つ。昔から続けてるせいか息の一つ切れない。他にも最低限の筋トレはしている。

「あら遊人ちゃん。おはよっ」
「おはようござこます」

マンションから出た俺に声をかけたのは隣のおばさんだ。よくいる主婦みたいで、特徴がないのが特徴といえる。このおばさんは俺を小さい時から知っている。いまだ遊人ちゃん呼ばわりなのはそのせいが。ナンセンスナンセンス。

「最近どう? 高校とか」

「ええ、特に異常は見当たりません
「相変わらず回りくどい表現ねえ」

おや、回りくどい表現だったか今の? 普通に喋つたつもりだが。
「そういえばもうすぐね。渚ちゃんの命日」
「もうこんな時期か……」

渚というのは俺の恩人の名前だ。渚は弟に殺された。俺の弟だ。

「と、こんな話してると遅刻してまつ
「いつてらつしゃい」

俺は話を切り上げて出掛けた。朝から湿っぽい話は無しだな。

俺の毎日はこんな感じで幕を開ける。岡崎市といつ町と共に目覚め、町と共に眠る。こんな毎日がただ続くだろうと、俺は思つている。

ただ、今日の空は雲一つなく、UFOが出たらすぐわかりそうな感じだ。宇宙関係の出会いでもあるかもしれない。そんな気が薄々していた。

1・ログイン！

通学路 堤防

「へ？ 遊人、あのゲームやつてないの？」

そんな毎日の締めくくりたる夕暮れ時、愛知県内を流れる矢作川の堤防で、うちのクラスの副学級長、上杉夏恋が意外そうな声を上げた。

「やつてないもなにも、俺はオンラインゲームしないぞ」

この時間帯となると、帰宅部連中が堤防を通つて帰る様子がよく見える。この堤防は俺達が通う私立高校の通学路になつていて。俺は帰宅部ではないが、今日は動画を作るために帰る。部活の雰囲気も結構フリーダムだし。

「やつてると思ったのに、この廃人ゲームは」

「人をなんだと思ってる」

夏恋は毒のある言葉を吐き出す。客観的に見て、夏恋は普通に可愛いが、この点でかなり残念である。

「せつからくだからやつてみなよ。このゲーム、通信費無料だし」

「怪しい。明らかに自分が騙された詐欺を紹介して道連れにしようとしてんだろ」

通信費無料という怪しさの隠し味を、俺は見逃さなかつた。なにしようとしてんだよこの毒キノコ。モバゲー等無料ゲームでも、パケット代などが別途でかかるのだ。

夏恋は長い黒髪をなびかせ、赤い携帯の画面を見せ付けた。赤つて明らかな毒キノコカラー。カエンタケみたい。

「その名も、【ドラゴンプラネットオンライン】！」

「！ おい、まさかそれ……」

俺は夏恋が自慢げに言つたゲームのタイトル、そして画面のロゴに見覚えがあつた。これはたしか、ネットで噂になつた奴では？

「 そうだよ白髪男！ 」これは去年に発表された、世界初の全感覚投入ゲームなのだ！」

「 ドーン、という効果音でも付きそうな勢いで夏恋がいう。夏恋が地味に俺が幼少の頃に失った髪の色素について言つてきただが、完全に思い出した。 」

「 「ああ、思い出した。去年、世間を騒がせたあれか」
全感覚投入とは、ゲーム内にプレイヤーの意識を送り込む技術のことだ。 」

「 イメージされるのは、よく漫画とかである「ログアウト不能」とか「ゲームオーバー＝死」とか、そんなやつ。 」

「 たしか、プレイヤーがアバターに入り込んで、まるで自分がアバター自身であるように操作できるとか 」

「 まさに漫画の世界だ。言葉じゃ上手く説明出来ない。 」

「 そういう、そんなマイナスイメージばっかだから、政府が規制したりね 」

夏恋は愚痴りながらイヤホンを俺に突き付けて言つた。

「 実際にやつた方がわかりやすいよ 」

「 なんだそのイヤホン 」

「 俺には、何故夏恋がイヤホンを突き付けてきたかわからなかつた。ただのイヤホンだ。 」

「 全感覚投入つてくらいだから、装置が必要でしょ？ だから、その装置、【ウエーブリーダー】 」

「 「これが？」 」

夏恋は当たり前の様に言つたが、俺はこんなちつこい装置が全感覚投入なんていうオーバーテクノロジーを引き起こすものとは信じれない。

「 私のお古。感謝しなさいよ？」

「 お古とか……。これ、高いんじゃ…… 」

「 1000円ポッキリ 」

「 安過ぎだ！ やっぱ嵌めようとしてんだろ！ 」

「聞こえていれば、君の生まれの不幸を呪うがいい」

「謀つたな、夏恋！ つてお前は仮面の三倍速か！ たしかに生

まれば不幸だけどさ！」

「あ、私ここから電車」

「待て赤い彗星！」

夏恋は駅に駆け込むと、ローカル線の赤い電車に乗つて戦闘領域を脱出した。

「…………」

俺は夏恋から渡されたイヤホンを手に、彗星の様に過ぎさつた彼女を見送つた。

数分後 某マンション

俺の自宅は学校から自転車で行ける距離の場所にあるマンション、その一室だ。

20階建ての内、10階という調度真ん中の階。俺はそこに里親と住んでいる。

「ただいま、つて誰もいないか」

俺の里親、直江愛花、姉ちゃんは愛知県警で刑事をしている。この時間、普段は家にいるがでかいヤマを抱えてると数日は帰れない。若いのに大変なこつた。まあ、実力があるから仕方ない。

案の定、でかいヤマらしくリビングの机に置き手紙がある。

『遊人へ。俺はちょっと厄介なヤマを抱えてるのでしばらく帰れない。帰つてくるまでに俺に勝てるよう、精進するのだな、フハハ

ハ』

「くそつ、一回勝つたからつて調子に乗りよつて！ 最強なのは俺のエールストライクだ！」

『俺』つて一人称は普通、アニメやゲームの主人公から移るか、友達から移るものだと人は言う。大抵の男子は親から『僕』つて人称を無理矢理定着させられるが、途中で『俺』に変わるとも言つ

た。

正直、俺の『俺』は母親代わりの姉ちゃんから移ったんだよ。置き手紙が置かれたのと同じ机には、台座で支えられた2台のロボットがあつた。まるで戦つてる様な『ディスプレイ』だが、そういう遊びなのだ。

「しかし、俺から提案してなんだが、プラモでこんな遊びしてんの俺らだけだよな……」

互いに見えない位置でプラモをポージングし、飾った時にどちらの攻撃が決まったかで勝敗を決する。昨日、俺と姉ちゃんはなかなか決着が着かず、最後は俺のエールストライクガンダム（主人公のロボ）が姉ちゃんのジン（量産機）のマシンガンで撃ち落とされた。

「趣味も姉ちゃんから移ったな……」

ゲームにプラモと、これも姉ちゃんの趣味。俺は両親でなく年の近い姉ちゃんに育てられたから、その分影響を受けたんだろう。

「複雑な家庭……」

それはさておき、俺は自分の部屋に向かう。複雑な家庭なのは承知の上だ。

部屋は姉ちゃんと整理してあるので綺麗だ。姉ちゃんの部屋など、とても足の踏み場はない。

机とベッド、ゲームが並べられた本棚にきちつと積まれた完成済みプラモの箱。そのくらいしか部屋にはない。

「さて、本題はこいつだ」

夏恋から貰ったイヤホン、【ワーブリーダー】。これで【ドランゴン】（ドラゴン）とやらができるらしい。

俺は部屋のノートパソコン（型落ち品。姉ちゃんからのお下がり）をインターネットにつなぎ、そのゲームについて情報を集めた。口笛はインターネットと動画編集に重きを置いてカスタマイズされている。その点だけなら最新型にも引けはとらん。

「まずは攻略ウィキだ」

俺は攻略ウィキを覗くことにした。案の定、ゲームの情報が沢山

だ。

集まつた情報を整理すると、そのゲームは名前をDPOと省略されることと、ゲームそのものは3年前に始まったことがわかった。さらに突き詰めると、DPO（早速使った）は全感覚投入というオーバーテクノロジーで問題となり、与党の渦海党がつい最近まで大々的な宣伝活動を禁じられていたり、無料で出来るのはインフレルノの資金力とゲーム内に看板を立てることで企業から貰える広告料のおかげだそうな。

アバターは男女逆転不能。脳波を読み取り性別を断定するからだ。ずっととゲームで女アバターを使つてゐる俺にはちとキツイ。

「ニコニコ動画にあるのか？」

俺は動画サイト、ニコニコ動画でプレイ動画を探した。やはり、ゲームの性質上プレイ動画はなかつた。代わりにゲーム内のカメラで撮影された動画があつた。見る限りPS3にも劣らない高画質だ。よいグラフィック。だが、肝心のプレイは見られない。

このニコニコ動画で俺は『ナイチンゲール』というハンドルネームを使い、ゲームを実況プレイする動画を投稿している。要は喋りながらゲームをプレイする動画だ。

「やはり俺の次なる実況動画を待つ声が……。ん？ メール？」そこまで調べたところで、俺の携帯が鳴り響いた。無料で取れる、電流を操る超能力を持つた少女が主人公のアニメのオープニングの着メロ。

「この着メロ、姉ちゃんか……」

姉ちゃんしか居ないが、家族のメールには着メロを変えている。メールにはこう書かれていた。

『面白いゲームの情報を拾つた。ドラゴンプラネットオンラインというらしい。ログインアプリが「コピーインストール出来るから、アプリを入れたSDカードを冷蔵庫に入れておいたよ。やつてみたら?』

「なぜ冷蔵庫に入れた！ そしてなにげに弟の背中を押すな！」

ＳＤカードを冷蔵庫に入れるという暴挙にでた姉ちゃんは見ての通りがさつだ。そのせいか、俺の家事スキルが上昇し続けている。姉ちゃんに任せると大惨事確定だからだ。特に料理。冷凍食品ぐらいいならなんとかなるが。

冷蔵庫までＳＤカードを取りに行き、携帯にカードを入れる。冷蔵庫の動くん棚の上に、ラップをかけた皿が。その皿にＳＤカード。

「もし変なゲームだつたら、姉ちゃんに責任転嫁だ」

仕方なく、部屋に戻りＳＤカードに入れられていたアプリでログイン開始。ウエーブリーダーを耳に付ける。

意を決して、ログイン。

「これでゲーム内に閉じ込められて、ＤＰＯ初の未帰還者になつたらどうしよう……」

俺のネガティブな発言は、世界が縦に一回転する感覚に打ち消された。

「で、これは？」

気がつくと、俺はプレイヤーのマイルームらしき部屋のベッドに寝かされていた。

妙に体が軽く、そして小さく感じられた。髪が長めのかせりたらした髪が首筋や頬にかかる感覚がある。

まるで自分がアバターであるみたいだ。これが全感覚投入か。アバターにプレイヤーの意識をぶち込むのか。

田の前に青白く光るウインドウがあり、『ドラゴンブランネットオンライン』なんて書いてある。

『まずは鏡で、アバターをチェック！』なんてもついでに書いてあるので、言われた通り、広いだけで何もないワンルーム一人暮らし部屋にぽつんと置かれた大きな鏡に向かう。服屋にありそうな感じの奴だ。

「この部屋、ちょっとＳＦ風味だな」

窓の夜空は宇宙などではない。俺はログイン前の出身惑星選択で、バトルが楽しめると聞いただけで即、【暗黒惑星ネクロファイアダーカネス】を選択したのだ。この惑星は一日中夜だそうだ。

「それより、アバターつと」

先程から、俺の声がハスキーというか女の子みたいな声だが、これが調べたところによる【ボイスエフェクト】なるものだろうか。アバターの外見とセットになつていて、ランダム生成されるアバターにあわせて選択されるとか。

体をよく見ると、それこそ女の子みたいに華奢だが、気にしそぎだろうか？ ログイン以上に意を決し、俺は鏡を見る。すると予想通りというかなんというか、

腰の下まで黒髪を伸ばし、赤い瞳をキョロキョロさせる、可憐な少女の姿があつた。

「んなつ…………！」

そんな馬鹿な！ 俺は叫びそうになる。しかし、絶句したままの口は叫び声を上げることを許さない。

これは何かの間違いだ。こいつは最近話題の男の娘キャラだ！ と、俺は自分に言い聞かせる。

服は初期設定なのか、ちょっとと厚手のフード付き黒いワンピース。赤の装飾がカラーバランス的にピッタリかわいらしい。

ワンピ、つまり、ズボンなどはいてはない。

精神的ダメージを増加させつつ、俺は決定的確認に移り、ある場所に触れる決意をする。

つまり胸とか。

「うげ……」

確信した、このアバターは女だ！ なんかリアルの俺にない感触

がある！ 見た目まな板だから気付かなかつた。

夏恋が休み時間にこつそり言つてたし、俺も攻略ウィキで確認したからこそ、この現象が信じがたい。

『異性のアバターの使用は、脳に深刻な影響を残すと熱地学院大学の調査で判明した。そのため法律で禁じられてる』、『故に、DPOでは脳波によつて男女を見分け、アバターを生成する』

一時間程度に渡つて調べたサイトの情報には、軒並みそんな情報があつた。公式サイトも例外ではない。ログイン前に確認したさ、何度も。女アバター使えないのはちとキツイと思いながらな！ 逆にこんな情報もあつた、気がする。

『脳波の違いで男女を見分けるシステムだが、開発者の大川緋色氏は「多分、性別逆転事故とかあるかもね。 多分だけどね（笑）」と言つてゐる』

「開発者出てこい！ 前に出ろ、前だ！ ミンチよりひでえや！」 こうして、俺はこの少女のアバターを外見から『墨炎』と名付け、恐らくであるが【ドラゴンプラネットオンライン】初の性別逆転プレイヤーとなつたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7928z/>

ドラゴンプラネット

2011年12月25日15時57分発行